

漢字は〇歳児でも覚えられる

漢字学習にもっとも適した時期が幼児期であることは、すでにお話ししたとおりですが、では、いったい何歳くらいから漢字を覚えることが可能なのでしょうか。

「まさか」と思われるかもしれませんが、実は「ウンマ」「マンマ」といったカクコトを発しはじめる生後八カ月頃には、もう十分に漢字を識別できることがわかっているのです。

もちろん、まだ発語能力が十分ではないので、見た漢字を正確に読むことはできませんが、たとえば、「目」と書いたカードを見せて「め、め、め……」と読んであげ、次にお母さんが自分の目を指差して「め、め、め……」と言う、ということをくり返していると、まだ一歳に満たない赤ちゃんでも「目」という漢字カードを見て、自分の目を指差すようになりますし、「め」という言葉を聞いて、何枚かの漢字カードの中から正しいカードを指差すこともできるようになります。

こうした〇歳児からの漢字教育は、すでに石井式漢字教育を実践するいくつかの保育園で行われていますが、見学に来たお母さん方も、まだよちよち歩きの子どもたちが、たくさんの漢字カードの中から漢字で書かれた自分の名前を見つけ出す姿を目にすると、一様に驚かれるようです。

もう一つ興味深いのは、こうした〇歳児教室を受け持つ先生方が皆、「泣いたり、むずがったりしているときでも、漢字カードを見せて読んであげると、大抵は機嫌を直して、じっとカードを見ているのです」

と話していることです。

一歳半で300字の漢字が読めるということで話題になった田中庸介君のお母さんのお話でも、生後八カ月頃、なかなか泣き止まない庸介君が何かを見た途端、ぴたりと泣き止んだので、その視線をたどると、神棚の下の「命名・田中庸介」と書かれた半紙だったそうです。そして、私の著書『漢字による才能開発』を頼りに、漢字カードを作って見せながら読んであげると、すぐに興味を示し、八カ月間で300もの漢字を覚えてしまったというのです。

なぜ、まだ言葉も話せない赤ん坊が、これほど漢字に興味を示すのか。その本当の理由を彼らの口から聞くことは残念ながらできません。ところが、たとえば赤ん坊が生まれながらにしてお母さんのオッパイを吸う^{すべ}術を心得ているように、目で“見る言葉”としての漢字に関心を示すのも、言葉の動物である人間としての本能であるように、私には思えてなりません。